２０１１年（平成２３年）７月２５日　月曜日

東奥日報新聞　掲載

決勝は姉妹校対決

光星 攻守に隙なし

木造 打線振るわず

【木造―光星学院】4回裏、光星学院2死三塁、田村が中越えに2点本塁打を放ち8―0と突き放す。捕手・大柳

▽準決勝（青森市営）

木造	0	0	0							0
光星学院	4	0	2	2	0	0	2x			10

（六回コールド）

（木）平澤、對馬―大柳
（光）川上、秋田―松本

【評】光星は初回から集中打で畳み掛けた。1死三塁の好機に、川上の左前適時打で先制。北條宮下の連続適時打で3点を加え、主導権を握った。三回にも2点を追加。四回は田村が中越えの2点本塁打を放ち、試合を決定づけた。先発川上は直球、変化球とも切れがあり、5回無失点。守りも安定し、無失策と隙を与えなかった。

▽本塁打　田村（光）
▽三塁打　北條（光）▽二塁打　澤、宮下、川崎（光）
▽暴投　平澤（木）
▽審判　菊池（球）西村（1B）関（2B）木下正（3B）

焦点

前日の2ケタ失点を反省

大差にも集中切らさず

光星

光星学院が圧倒的な強さを見せつけた。10―0で六回コールド勝ち。どんな場面でも集中が途切れない、強い気持ちが際立った。

前日の青森山田戦は、昨秋の新チーム始動以来、公式戦で初めての2ケタ失点。しかも、序盤に大量点を奪ってコールド勝ち目前の状況から、激しく追い上げられた。「気の緩みがあった」（主将川上）。試合後、仲井監督は「この勝利はあくまで通過点。気持ちを切らさないように」と言い聞かせていたという。

この日は、先発の川上が、打たせて取るピッチングに徹した。「気を抜かずに」と、五回までで被安打はわずか2本。8―0の六回から登板した秋田も、相手打線を三者凡退に打ち取り、復調の気配を見せた。

投手陣の気迫に呼応するように、打線も着実に得点。初回に4得点した後も、三、四、六回にそれぞれ2得点。前日のような走塁ミスもなく、冷静に走者を進めた。

決勝の相手は姉妹校の野辺地西。2年前の同大会準々決勝では九回に同点にされ、延長戦の末敗れた苦い思い出がある。

だが、川上は「自分たちの力を発揮できれば勝てる。先輩の思いを晴らしたい」と落ち着いている。14年ぶりの春夏連続甲子園出場まであと一歩。ナインは積み重ねてきた勝利を糧に、自信を持って決勝に臨む。

（八島佳奈子）

木造先発の平澤は決め球の外角変化球を光星打線に見極められ、甘い球をことごとく痛打された。打線も振るわず散発2安打。二塁を踏めず、力尽きた。

何もできなかった

○…「守りも攻めも、何もできなかった」。0―10のコールド負けに、木造の平山監督は力の差を認めるしかなかった。

光星学院先発の川上について「変化球の切れが予想以上にあり、（バットの）芯で捕らえられなかった」。打たせて取る投球術にはまり、凡打の山を築いた。主将の角田は「いい投手と言っても、同じ高校生。打てると思ったけれど…」。

それでも平山監督は、劣勢にも笑顔を忘れずにプレーした選手を評価。「春の県大会にも出場できなかったチームが、よくここまで頑張ってくれた。自分を信じ、ついてきた選手を褒めてあげたい」

【光星学院】

	打	安	点	振	球
澤（⑨）	3	0	0	1	0
天和（⑦）	3	0	0	1	0
久田（H）	3	0	0	1	0
田上（⑤）	3	1	0	0	0
川上（⑥）	4	2	1	1	1
甲村（8）	2	2	2	0	0
北條（2）	3	3	1	0	1
宮下（⑧）	3	2	2	1	0
秋田（1）	3	0	0	1	0
金田（③）	3	1	1	0	2
川崎（R）	3	1	0	0	0
岸本（4）	3	1	0	0	0
一宮（H）	3	0	0	1	0
榎本（4）	2	0	0	0	0
松宮（②）	3	0	0	0	0
矢本（1）	3	0	0	0	0
併殺	0				
残塁	7				
盗塁	2				
投手	回	打	安	振	球	失
川秋	7	27	9	10	1	6
手上田	1	17	2	3	0	0
		3	0	0	0	0

【木造】

	打	安	点	振	球
光塚（⑨）	3	0	0	1	0
伏見（⑦）	2	0	0	0	0
須藤（H）	3	0	0	1	0
荒関（⑤）	3	0	0	0	0
山田（⑥）	3	1	0	1	0
角橋（8）	3	1	1	0	0
高柳（2）	2	2	0	0	0
大澤（1）	2	2	0	0	0
櫛士（③）	3	2	0	1	0
笠原（④）	3	2	0	0	0
對馬（①）	2	0	0	0	0
併殺	0				
残塁	4				
盗塁	0				
投手	回	打	安	振	球	失
平澤	4	20	2	0	3	0
對馬	1⅔	10	1	1	3	2

東奥日報社提供